

学習場面における集団同一視の実験的研究

—— 特に社会的比較過程の理論と比較して ——

藤 田 達 雄

問 題

Kagan, J. (1958, 1966) は、同一視概念を従来のように不安の解消を目的とする現象としてみるのではなく、価値ある目標に到達することへの欲求の現われとしてみることによって、同一視を学習の動機づけとして捉える仮説的な同一視理論を提案した。この提案に基づいて、湯川は教師に対する同一視の生徒の学習に及ぼす効果に関する調査的、及び実験的研究を行ない、この仮説的理論が支持されるものであることを示している。このように、同一視を学習の動機づけとして捉えた場合、個人の学習が、教師のような指導するものと指導されるものとの間にある関係だけでなく、その個人の所属する集団との関係にも規定されるものであることを考えれば、集団（に対する）同一視の学習に及ぼす効果も期待される。そこで、本研究でも Kagan, J. の同一視理論を集団同一視に適用することによって、その学習効果を実験的に検討しようとした。

Kagan, J. の同一視理論を集団同一視に適用する際、これまで集団同一視のメカニズムが明らかとなっていない、あるいはそれらしき仮説や理論のみられないところから、個人をモデルとする同一視の仮定されたメカニズムを集団をモデル(GM)とする同一視に適用してよいか否かを検討したところ、学習の動機づけとしての集団同一視は、以下の2つの仮説で示されるような現象であることが予想された。

仮説 1 集団のある規範が、その成員によって共有したいと願うような価値を認められている場合、その成員が集団規範と彼のそれとのズレを認知すれば、彼はそれを解消することに動機づけられるであろう。

仮説 2 ある人が、彼の所属する集団の規範（標準）を上回ると同時に、その規範に価値を認めており、その集団に魅力を感じている場合、彼はその集団の生産性を高めるために、彼自身の学習に動機づけられるであろう。

本研究では集団同一視と社会的比較過程の理論に関する仮説とそれらの仮説に基づく実験仮説が導びかれたが、紙面の都合上省略する。

そしてこれら2つの仮説で予想された集団同一視現象は、S(被験者)の認知するズレが大きいほど、成員間の相互作用があればあるほど、生じやすいことが予想された。

しかしながら、集団同一視に関するこれらの予想は、すでに一般的となっている Festinger, L. の社会的比較過程の理論で予想される現象と類似しているように思われたため、両者を比較したところ、集団同一視ではSの認知するズレが大きいほどズレの解消に動機づけられるのに対して、社会的比較過程の理論ではSの認知するズレが小さいほどよりズレの解消に動機づけられる点に異なっているように思われた。そのため、両者を実験的に比較することによって、Kagan, J. の同一視理論を集団同一視に適用することの妥当性、集団同一視概念の必要性を検討した。

方 法

被験者は小学校6年生6クラス、248名で、2週間にわたる4回の実験に参加した。各クラスごと、実験第一日目の課題（数字分類作業）の成績で等質となるように、成員間のソシオメトリック関係が相互選択的な集団、相互拒否的な集団、そのどちらでもない Neutral な集団の3条件からなる実験集団（いずれも4人集団）を構成し、更に討論を行なうクラスとそうでないクラス、各々3クラスを設け、計6条件の実験集団を構成した。残る3回の実験では、どの集団の成員にも課題に取り組む前に、所属集団の平均点（集団規範に代わるもの）とその成員の成績を情報として与えられ、次回の要求得点を求められた。成員個人の成績は、上記仮説の検証のため、常に集団の平均点をはるかに上回る点をとる成員(高 status)、平均をわずかに上回る点をとる成員(中上 status)、平均をはるかに下回る点をとる成員(中下 status)、平均をはるかに下回る点をとる成員(低 status)を第一回目の課題の成績で決定し、各 status に応じた点となるように毎回操作された。この場合にも、各集団とも情報として提示された成績で等質となるようにされていた。討論群では、この情報提示につづいて討論が行なわれ、各集団の目標を決定し、その前に答えた要求得点の修正が許

された。そして課題が与えられた後に、塩田の教師に対する同一視スケールを参考にして作成された集団同一視検査(GIT)と集団魅力検査(GAT)が課された。

結果とその考察

集団同一視に関する仮説や社会的比較過程の理論で予想される現象が、Sの主観的知覚に基づいて生起することが考えられたため、GITで上位、中位、下位の各群を構成し、集団同一視に関する仮説を検討した。また社会的比較過程の理論から導びかれる予想は、従来の研究との対照をするために、GATで上位、中位、下位の各群を構成することによって検討した。GIT、及びGATの各上位群、中位群、そして下位群の S_s は、ソシオメトリックな関係に基づいて構成された相互選択的な集団、Neutralな集団、そして相互拒否的な集団の各成員にはば対応するものであった。

1. 集団同一視のConativeな現象に関する仮説の検討

①課題のPerformanceの分析結果：非討論群は討論群より有意に優れていたが、討論群では予想通りGIT上位群、中位群、下位群の順で優れ、討論・GIT上位群の中でも低statusの S_s が最も優れていた。討論群よりも非討論群の方が優れていたのは、課題が成員間の協力を必要とせず単独でもできるものであったことによるのではないかと考えられた。また、討論群の結果はSの認知するズレの大きいほど、そして成員間の相互作用があるほど集団同一視反応の生起する可能性のあることを示すものと考えられた。②要求水準の分析結果：要求水準の高低は、 S_s の要求得点と情報として与えられた S_s の前の得点との差で測られた。討論群は非討論群より有意に優れ、非討論群ではGIT中位群と下位群が上位群より有意に優れているのに対して、討論群ではGIT上位群がどのstatusでも有意に優れていた。この結果は、仮説1と2を支持するものであり、成員間の相互作用、及び集団目標の有無が集団同一視反応の強さを規定する重要な要因であることを示すものと考えられた。

2. GITスコアの変化にみられる集団同一視現象のCognitiveな側面の検討：非討論群では、GIT上位群を除く2群の各statusのスコアが、実験回数を増すごとに減少しているのに対して、討論群のGIT3群の各中下statusと低statusの S_s のスコアは、実験回数が増すにつれて増加する傾向を示していた。この結果から、集団

成員間の相互作用が、Sの他成員達に対するsimilarityの知覚を容易にしたり、Sと他成員達との信頼関係を確立すること、そしてSの他成員達に対する親密性を増すうえで重要な働きをしていることが考えられた。

3. GATスコアの変化にみられる集団同一視現象のAffectiveな側面の検討：GATスコアの3回の実験でみられた変化は、GITスコアの変化と同様のものであり、GATスコアの変化にも討論の有無の要因が強くまわっていることが考えられた。

この他、上記結果の分析に用いられたデータは、予備調査で測定された達成動機の高低や実験で用いられた課題に対して S_s の認める価値の高低でも分析されたが、これらの要因はGITスコアの高低や討論の有無の要因ほど顕著な効果をもつものではなかった。

また、社会的比較過程の理論から導びかれた仮説に関しても、集団同一視に関する仮説と同様に結果の分析を行なったが、支持する結果は得られなかった。なお、予備調査で学習場面における S_s の成績の比較の相手をクラスの中で選択させたところ、ほとんどの S_s が、すでにソシオメトリックテストで選択した S_s の好きな人を選んでいった。この結果は、人が一般に同一視しようとする傾向を持っていることを示すものと考えられたが、社会的比較過程の理論で問題とするrelevanceの強さを、本実験で、GATで測られた集団に対する S_s の感情の好悪を両極として等しくしたことが妥当なものでなかったことによるのではないかと思われた。つまり、GATで測定された集団に対する好悪の評定値の絶対値が同じであっても、実際には評定値が等間隔となっていなかったことが考えられた。むしろ、GITで測定された集団同一視スコアが高いほど、Sの集団に対するrelevanceも高いと仮定するならば、社会的比較過程の理論から導びかれた、ズレが小さいほどズレの解消に動機づけられるという予想は支持されなかったものの、情報として与えられた小さいズレをSが小さいズレとして受け止めたか否かの検討の余地が残されているように考えられた。

以上の結果より、以下のような結論が述べられた。1. Kagan, J.の同一視理論はMが集団である場合にも適用可能であること。2. 所属集団への同一視反応は、SがSの所属集団の成員達の中で、Sの成績が下位か上位にある場合に最も強くなること。3. この同一視反応は、集団成員間の相互作用がある場合に強められること。